



Title	VIAGGIO DI HIERONIMO DA SANTO Stephano Genouefe 及びHo liuro de Nycolao Venetoに関する研究ノート
Author(s)	林田, 雅至
Citation	
Version Type	A0
URL	https://hdl.handle.net/11094/94535
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

5. テキスト：A carta do genoues, Treßlado de hũa carta ã Jeronimo de fanto Esteuã(A carta de Jerónimo de Santo Estevão)：翻訳：

第 96 葉[ページ]：ジェノヴァ人の手紙：

『ジェロニモ・デ・サント・エステヴァンがトリポリより、バイルートのジョアン・ジャコミ・マイエルに 1499 年 9 月付けで書き送った手紙の翻訳。

我々の幸運なる旅に関して、癒えぬ痛みがぶり返すとは言え、貴国王陛下のご要望を満足させるために以下のようにお話をさせていただきます。ジェロニモ・アドルノと私は、共にどうしてカイロへ向かったかをご覧ください。また、買い求めたサンゴ、ボタン、他の商品についてお伝えします。我々はシリアに向かって出発し、15 日でカリスに到着しました。カネ(ケイン)港に着きました。旅程で我々は、偶像崇拜時代に建造されたまことに不思議な建物とともに廃墟となった多くの古代都市を見つけました。なお多くの神殿は存在しております。その後、我々は、カネ(ケイン)から陸路で出発し、7 日間陸路で進みました。モーゼとイスラエルの民がファラオに追放された時、登ったあの山々と荒野(砂漠)に我々も登りました。最後に紅港[紅海の港]のコゼールに到着しました。そこから、我々は、すべて綱(ロープ)で縫い付けられ、マット生地 of 帆を張る船舶に乗り込みました。それから 35 日間航海し、毎日夕方になると、この上もなく美しい港に寄港しました。しかし、どこも無人でした。最終的に、我々は土地から 1 マイル離れた島に到着しました。この島は、プレステ・ジョアン王国の港であり、島の領主はモウロ人でした。その島に 2 か月滞在し、我々は出発し、これまでと同様に相当の日数をかけて海上航海し、海上に真珠狩りをする多くの船舶を目撃しました。しかし、この真珠はそれほど良質ではありませんでした。

Preste Johã (Preste João):

アルヴァレス『エチオピア王国誌』(池上岑夫訳・長島信弘注・解説、大航海時代叢書第二期 4、岩波書店、1980 年 1 月)

Francisco Alvarez, *Verdadeira informação das terras do preste João das Índias*, 1540.

<https://ci.nii.ac.jp/ncid/BA88283730>

(URL 最終閲覧日付：2024 年 2 月 19 日)

こうした航海の 10 日間の最後に、我々は、船舶交通の往来が盛んで、モウロ人が住むアデソンの街に到着しました。その土地の領主はまことに善良にして、誠実で、他の不誠実な領主と私は彼を比較することができないと思うほどでした。我々は、この街に 4 か月滞在し、そこからロープで縫い付けられたインド船一隻で出発しました。帆は綿生地でした。25 日間陸地を見ずに海上航行し、その後、多くの島を見ました。しかし、寄港することはありませんでした。

第 96 葉[ページ]裏面)：

しかし、その果てに、カリカットと呼ばれる大都市に到着しました。ここで、胡椒と生姜が栽培され、コショウの木は、ツタに似た葉を持ち、他の木に絡みつき他の木によって成育し、その莖房は手のひらの半分以上の長さで、指のように細く、たわわな粒房は非常にたっぷりしています。これらの地域で栽培される胡椒が、当方の地で存在しない理由は、我々が植樹するそれらの木を持たないからです。我々に関して言われていることは真実ではありません。コショウの栽培で、それ以上成育しないようにある時期に燃やしてしまうからです。熟して、それを収穫したときはヘデラのように緑色で、天日干しすると、5～6 日でそれは黒っぽくなり、見る見るうちに、表面にしわが寄るのです。『生姜、新鮮な緑色の部分を植え、一か月後には、大きく成長します。野生のユリに似た葉を有しています。』その都市の指導者は偶像崇拝者で、住民全てもそうです。彼らは雄牛も太陽も崇拝し、また彼ら自身が制作する多くの偶像を崇拝します。彼らが死ぬときにこれらは燃やされ、そして数多のやり方があります。ある者たちは雄牛、雌牛を除くあらゆる種類の動物を殺します。その地域では、誰かが殺傷したりすると、その動物を屠殺してしまいます。また、ある者は、決して肉や魚を食べない。まして、生きている動物を決して食べないのです。それぞれの妻は 7 人か 8 人の夫を有しています。また、男性が処女の女性と結婚することもなく、むしろ、生娘と結婚したいとき、彼は彼女を誰か他の男性の元に 15 日か 20 日間留め、その結果、彼女は不義の女となります。この都市には千にも上るキリスト教徒の家屋があり、そこは高インドと呼ばれます。

『それから、ここで上記のやり方で建造されたもう一隻の帆船に乗り込んで出発し、26 日間航海し、シナモン(セイロン・ニッケイ)が栽培されるセイロン(Ceylon)と呼ばれる大きな島に到着しました。シナモンの木は葉の形状からサクランボのようです。ザクロ、ヒアシンス、ネコノメソウが栽培され、他の宝石はそれほどよくない。山にはこれ以上のものはなく、我々は 1 日だけ滞在しました。その島の領主は、これまでと同様に偶像崇拝者で、彼の民もそうです。他に、ここには、カリカットにも見られるインド産ナッツの実になる多くの樹木があり、まさしくヤシの木のようにです。

ザクロ：

<https://powo.science.kew.org/taxon/urn:lsid:ipni.org:names:25518-1>

(URL 最終閲覧日付：2024 年 2 月 19 日)

ヒアシンス：

http://ylist.info/ylist_detail_display.php?pass=10515

(URL 最終閲覧日付：2024 年 2 月 19 日)

ネコノメソウ：

http://ylist.info/ylist_detail_display.php?pass=4642

(URL 最終閲覧日付：2024 年 2 月 19 日)

『ここを出てから 12 日後、コロマンデルという別の土地にたどり着きました。そこは赤いジャクダン(白檀)の木が栽培され、たくさんの樹木があり、その樹木で家屋が作られています。その土地の領主は上記の人々同様に、偶像崇拝者です。そこにはまた別の風習があります。

第 97 葉[ページ]：

その理由は、一人の男性が死に、人々が彼を茶毘に付したいと望むとき、彼の妻の 1 人が生身で彼とともに火葬されます。これは彼らの習慣です。我々はその土地に 7 か月滞在しました。『それから我々は上記同様に建造されたもう 1 隻の船に乗って出発し、20 日でペグと呼ばれる大都市に到着しました。ここは低インドと呼ばれます。この街には、1 万頭以上の象を所有し、毎年 500 頭を飼育する偉大な領主がいました。この土地は、アヴァと呼ばれる土地までかなり遠く、そこまで陸路で 15 日間を要します。その土地アヴァでは、ルビーや他の多くの宝石を産出します。我々の望みはそこに行くことでしたが、アヴァでは、ある領主ともう一人の領主の間で戦争があり、誰にもそこに行かせようとしませんでした。

我々はペグの町で、所有していた商品売る必要がありましたが、土地の領主を除いて、その大部分を買うことができませんでした。彼はこれまでと同様に偶像崇拝者であり、彼にそれ売る必要があり、それは 2000 ドゥカーートの価値に達して、領主は自分のものとして、上記の戦争による反乱のために満足のいく結果となりました。ペグには、1 年半滞在する必要がありました。その間、毎日、領主の家に呼び出され、ある時は寒く、またある時は暑く、多大な艱難辛苦の日々を強いられました。そして体力的に劣るヒエロニモ・アドルノは、こうした苦勞に耐え難く疲弊して、また彼を大いに悩ませた以前からの持病が重なり、55 日間、医者にもかかれずでしたが、神に召されるがままに、福音書記者、聖ヨハネの夜、1496 年 12 月 27 日、我が主なる神に靈魂を返す必要がありました。そして、たとえ宗教者の数が少なく、彼に教会の儀礼を提供できなかったとしても、彼の少なからぬ悔い改めと忍耐、そして彼が常に維持してきた善き人生によって、私は主なる神、我らの神が彼の魂を受け入れてくれると信じ、かくして私は神に祈祷しましたし、今も祈り、そして彼の体を一つの教会堂に埋葬しました。彼の死によって、何か月も私は大いに苦しみ、悲しみに打ちひしがれたことを申し上げます。そうした大事を抱え、私は立ち去りませんでした。しかし、その後、私は、私を苦しめ、私を去らせることがなく、かと言って癒しの薬もなかったのですが、何人かの善良なる男たちに慰められ、私は日常の生活をを取り戻そうとしました。これが私の為したことであり、多大なる苦痛に苛まれ、またそれなりの費用がかかりました。私は乗船し、マラッカに向かい、出発しました。『25 日間海を航行し、ある朝、天気あまり良くなかったので、スマトラと呼ばれる非常に大きな島に到着しました。そこには多くの胡椒、正絹、胡椒(長)、ベンゾイン(安息香)、白ジャクダン(白檀)、及び他の多くの香辛料がありました。

第 97 葉[ページ]裏面)：

そして船主は他の船員や商人とともに、天候が最悪であるので、慎重に我々の荷物を下ろすように忠言してくれました。モウロ人である領主は、異なる言語を話し、我々が行った他のすべての土地で理解される言語とも異なるものの、とにかく我々の商品をこの土地に荷下ろさせました。領主から我々に疑問が投げかけられました。彼に私は、私の相棒が亡くなり、すべての商品は彼のもので、それを望んでいたと伝えました。かくして、領主がモウロ人である土地では、一人が亡くなり、子供も兄弟もいないと、その財産は領主のものになるというのです。彼は私を同席させた上で、即座にすべてのものを差し押さえる命令を下しました。我々のすべての衣服、まさしく私の所有物も調べ上げ、相棒が買い求めた 300 ドゥカードの価値あるルビーがありましたが、領主はそれらを取り上げました。カイロから持ってきた他の商品が、部屋に置かれ、取り敢えず、そのままとされました。持ってきた商品について、カイロからであることが証明されなかった場合は、すべては私から取り上げられます。その場にイタリア語の知識と知性を備えた裁判官、友人がいて、神の助けと彼の支援で、大変な苦労と大いなる幸運でうまく切り抜けました。ルビーは没収されたものの、持ち前の前向きの気持ちで、ここは良くないと判断し、出発を決断しました。所有していたすべての商品を売却し、絹とベンゾイン(安息香)に替えました。私は船に乗り込んで、35 日間航海し、カンバイアに戻りました。天気が良くなく、我々はモルディブ(マラバル)と呼ばれる諸島に到着しました。7 千から 8 千の島々に島民の姿もなく、小さく低地の島でした。ほとんどの場合、海水が島に入り込み、島の間隔は 1 マイル半。そこには無数の島民がいて、全員黒人で、裸であるが、健康状態に優れ、機敏で、モウロの信仰(イスラム教)に篤かった。すべてを支配する一人の領主が存在しました。そこには大きな果実をつける樹木があって、彼らは魚とそこに運ばれる僅かの米を食糧にして、暮らしていました。この土地で、出発する適切な時期を待って、6 か月滞在する必要がありました。その後、我々は航海に向けて出発しました。しかし、運命は、既に多くの不幸に未だ飽き足らず、限界を越え、一層大きくなった時、8 日間の最後に、5 日間降り続いた暴風雨が収まったものの、船はすべて水浸しの状態でした。

第 98 葉[ページ]：

船には覆いも掛けられず、修復する手立てもないほどに水浸しで、船底に行ってみると、泳法を心得た者は全員救われ、そうでない他の者は溺死していました。幸運にも、主なる神は私に、朝から晩課まで海面を漂わせ、太い木片に掴まるようにさせて下さいました。神の御加護の恩恵に浴し、我々に合流しようと出発した 3 隻の船が 5 マイル進み、我々の不運な苦境を知り、即座に彼らはボートを用立て、接近し、彼らは、私も含む生存者を引き上げてくれました。生存者の我々は思う通りに船に分乗しました。私はその船の一隻に乗り込んで、幸運にもカンバイアまで行きました。その領主はモハメダン(イスラム教徒)で偉大なる領主です。漆と染料インディゴ(青藍)は、この地から始まって、生産されることになります。ここで私はアレクサンドリアとダマスкас出身の数名のモウロ人商人を見出しました。彼

らによって、私は出費のための金銭支援を受けられました。それ以来、私はダマスカスの商人保安官と契約を結び、1 か月彼の警護の下、オルムズまで行きました。到着したこの土地オルムズに 60 日留まって、持ってきた商品の権利関係を片付けて、そのことを彼の一人の監督官に託しました。そしてそこから出発しました。オルムズには、豊富な良質の真珠があり、よい市場もありました。『ここを出発して、アルメニア人とアザミ人の商人たちとともに、何日もかけて、アザミの国に到着し、1 か月滞在、隊列(キャラバン)に合流するのを待って、隊列とともにシラスにきました。3 か月間続いた戦争のために逗留し、出発後、私はスパーン(Spaan)に行き、そこからカーファン(Cafa)に行き、次にソルタニーイエ(Soltania)の都市に行き、そしてタブリーズ(Tauris)に辿り着きました。戦争のために数日間滞在しました。そこから私はアレppo(Aleppo)に行きました。途上、私は略奪強盗に見舞われましたが、何とか到着し、そこにキャラバンがいました。アザミの商人たちに助けられ、アレppoにきました。ここで商人たちが私に頼んだのは、宝石、絹、真紅を購入し、他の物を買うために再びタブリーズに戻りたいと言いました。しかし、道中が安全でなかったので、我々はそこに行きませんでした。『私は、私の罪のために私に降り掛かった旅全体のことをお話します。ともかく成功裡に終わった旅でなければ、私は自分で稼いだものに非常に満足したことが分かったでしょうか。また同行者とともにいて助けられながら、私が誰をも必要としなかったと思っていたことをしっかり振り返ることができたでしょうか。ともかく、何人にも幸運を証明することはできないのです。私は我が主に絶大なる讃辞を送ります。私を生き延びさせ、私に恩恵を与えてくださったからです。我が主がどうか貴君主様をお守りくださいますように。終。